

令和4年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 内閣官房長官賞受賞

島のお年寄りの温かな愛に包まれる 心のふるさと

宮城県石巻市 網地島あじしまふるさと楽好がっこう

虐待等で苦しんできた子や東日本大震災で両親を亡くした子が、小さい頃から高校生になるまで何度も仙台から車と船で3時間の網地島に来て、島のお年寄りの温かな愛に包まれることで、頑なな心や荒んだ心がしなやかになって、自分自身を大切に思えるようになり、思いやりの気持ちが育まれていきます。16年間の温かな交流により、島のお年寄りが子どもたちを助けるだけの関係ではなく、成長した子どもたちから島のお年寄りが勇気づけられるようになりました。

楽好のきっかけは、当時の行政区長桶谷敦さんの言葉。「限界集落で子どもがいない寂しさを自分たちはこんなにも感じているのに、島の外に目を向けると、虐待などで命を落と

す子どもがいる。虐待された子に大切にされ、愛される記憶を一つでもプレゼントしてあげたい」。桶谷さんが、仙台市内の児童養護施設に足を運び、2006年、子どもたちを受け入れる「網地島ふるさと楽好」が始まりました。子どもたちに何の見返りも求めない恩送りの楽好です。この名称には、「網地島を心の拠り所にして幸せになってほしい」、「網地島で好きなことを思い切り楽しんでほしい」との願いが込められています。

仙台市内の四つの児童養護施設の子が招待され、2泊3日の特別な時間を過ごします。初めは警戒している子も、自然と笑顔になっていきます。オニヤンマとにらめっこする子、島の外ネ

しむ子、島の魚釣り「あなご抜き」に挑戦する子も。先生は漁師歴60年のおじいさん。厳しい教えも素直に聞き入れ、岩の下に潜む魚と真剣勝負です。釣った魚は浜焼きにして、子どもたちに御馳走します。子どもたちは、自分が釣った魚は愛おしく、骨まで舐めるように食べてしまいます。

島の食事は、島のおじいさんが海から捕ってきたばかりのうにや貝などを教わりながら、慣れない手つきで下ごしらえから料理し、家族のように楽しく会話しながら食べます。「見て!!おかずのうにが逃げていくよ!!」と子どもたちの喜々とした声で島はとても賑やかになります。

これまで672名の子を招待しました。費用のすべてを工面し、足りないところは島の方々からいただいた物で賄い、子どもたちの幸せだけを願い、16年間続けてきました。子どもたちが喜ぶ姿を思い浮かべながら、一年がかりで準備します。苦勞を厭わない理由を「子どもの笑顔を見るだけで元気になる」「文集が楽しみだ」と島のお年寄りは話します。さらに、気遣いのできる頼もしい高校生に成長する姿を見ることも楽しみになってきています。

別れの日、普段は素直に気持ちを言えない



こうやって漕ぐんだよ



島だけのあなご抜き



額を寄せてつづ貝をむく



ひらめが届けられた



おじいさんエサを付けて

コと遊ぶ子、杉の葉を使った火起こしに真っ黒になって取り組む子。ちゃっかり味見を楽





お餅つき おばあちゃんとの息もぴったり

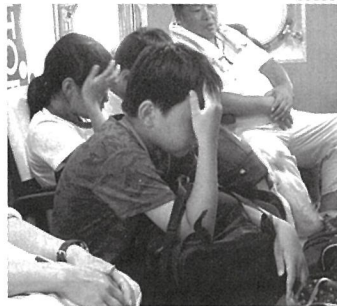
子ども、自分から手を挙げて、「ありがと、楽しかった」「ごはんおいしかった」と短いながらも心のこもった言葉を伝えます。島のお年寄りには涙が止まらなくなります。出航ではお互いに見えなくなるまで手を振り続けます。子どもたちは涙が止まらなくなり、いつまでも泣き続けます。虐待や貧困や震災等で苦しんできたからこそ、島のお年寄りの温かな心を大切に思ってくれます。素直な涙が子どもたちの心を育んでいます。

島から戻ると、子どもたちは楽しかった思い出を言葉と絵で表して文集を作り、島のお年寄りに贈ります。「文集の絵には、島の美しい風景や遊んでいる様子などが描かれてい



みんな網地島に帰って来いよ

帰りの船でいつまでも泣き続ける



ますが、絵の中の人たちは、みんな笑顔なんです。私たちは、子どもたちが笑顔の人物を描くことを非常にうれしく感じています」（児童養護施設小百合園園長）

2011年の東日本大震災。10mを超える大津波は、家々を破壊し、漁船を沈め、電気や水道を遮断。地盤は1.5mも沈下し、港も道路も海の中に沈み、島はおびただしい瓦礫に埋もれました。網地島は孤立し、誰もがも

う島には住めないと諦めました。

そんな絶望の中、島に子どもたちから百通を超える手紙が届きました。島を案じた子どもたちと施設の職員とが相談し、手紙でエールを送ろうと決めたのです。島のお年寄りから心を学んだ子どもたちの手紙が、震災で苦しむ島の希望となりました。桶谷さんたちは、「来年の夏、島に子どもたちを迎えたい」と奮起。海から打ち上げられる大量の瓦礫を諦めずに根気強く何度も片付け、翌年にはすべて撤去。開校前日には夕方まで、桶谷さんたちが、子どもたちがケガをしないように、小さな破片を丹念に拾い、裸足で入れる海を取り戻しました。観光客は一人もいない子どもたちだけの海です。

2015年に桶谷楽好長が急逝された時、子どもたちがこれまでのお礼を言いたいと、遠く仙台から通夜に駆けつけました。子どもたちは桶谷さんのために自分たちができることを話し合い、「今度、島に行ったら、思いっきり楽しむ」と誓いました。桶谷さんは島で思いやりの心を学んだたくさん子どもたちに見送られました。10年かけて、桶谷さんの思い描いた子どもたちへの願いが叶い、誰にでも誇れる心優しい子どもたちがたくさん育っています。

（網地島ふるさと楽好用務員見習 佐藤浩也）